

神恩記

全

特35

748

大日本教育會館				東 新 刊
一册	一八五號	三架	一七函	

014140-000-2

特35-748

神恩記

千家 尊澄 / 編

M15

ABB-0416

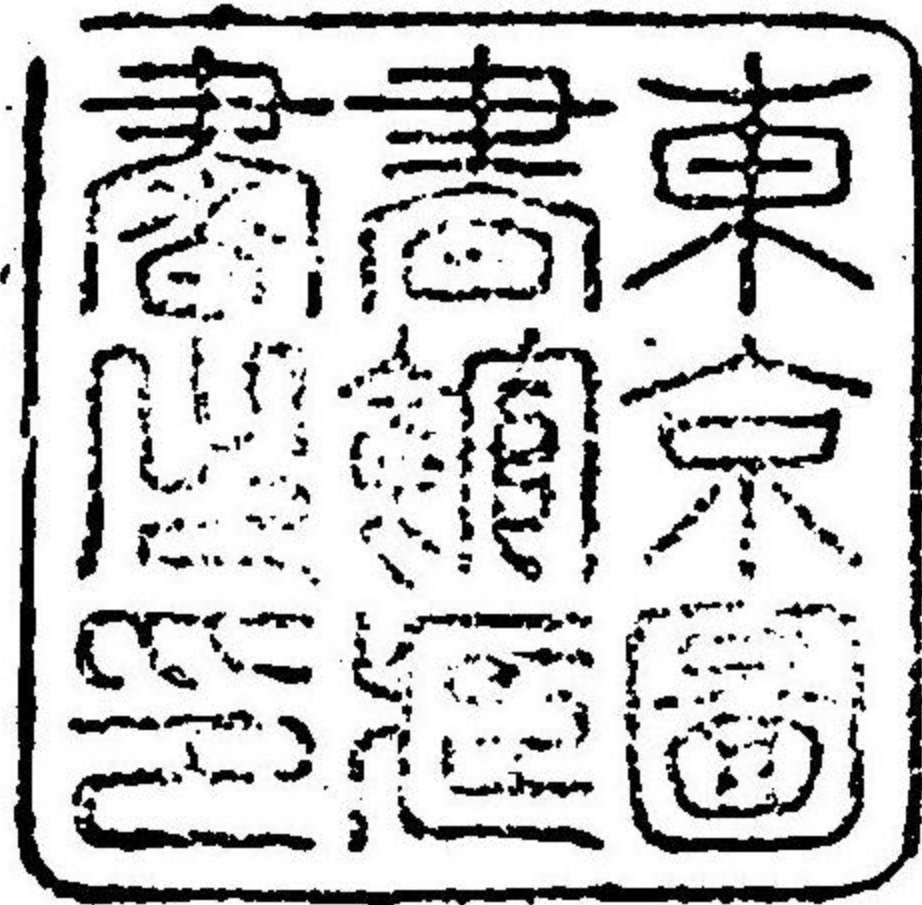


故
千家
尊
澄編輯
權中講義竹崎嘉通校正

神恩記

全

千家藏



神恩記序

願身乃世に人の高き賤に別あらずして神の
恩頼ふより有経を其神と神の中にも有
出雲の大神もも天下を遠固あすも食物を
物任家乃基を定めあし又青人竹は福あかり
災もあひて幸若も事しを懐きよも醫者茶神あ
の樹より恒泉紅法もあすも起あし願世を望
美孫命も護を給ひし後と出雲の王事とあり

たすしの雲泥の上まゝの治め玉ふ事ありあは
願せし更下のも云はば死せる後の其思教は浅
く事すむを嫌みほく一向の類をなす人
もたよれん然るを世人の多き中よかす深
由縁をも知らざるあはぬ方よ悉く者なきあは
いと慨たぐ其の二の事ありあるを近年頃
思ひけしをあれ大神乃御霊發乃事
まの集り書はれんよの意を思教の

百千の一きの知らざる様様もなりあんと思
はあに故松重君の御草紙の中よ遠
近乃人々御霊治を蒙りしお経を集め
多しひて神恩記と名けり書十
卷あつりかろを見出づるは若くはま
あるその文庫の底に秘めたりん其を
おのふまに大教正乃其の語を
形事といふなりとて其のあやうな

社に於ては、神の御心より、善く世人の心を
導く思ふは、神の御心より、先づ心を急ぐ事
なり。

明治十四年八月をり

竹崎嘉通

神恩記一卷

千家尊澄編輯 權中講義 竹崎嘉通校正

本牟智和氣命出雲大社に詣玉ひて

靈徳を受給ひし事

垂仁天皇の御子本牟智和氣命八年長たまふま
て言語給えど御父の天皇常々思まいつるよ
夜御夢に神託ありて覺し玉えく我宮を天皇の
御舎の如く修理玉えし御子必眞事言えんと覺
し玉ふよよりて尙神の御心あらむと占へ給ひ
たま出雲大神の御心ある事あられたり是よ於

て御子をして出雲大神の宮を拜ましめまさん
とて曙立王菟上王を副へて遣し玉ふ時先曙
立王ふ命せて祈誓まをさしめ玉ひて此大神を
拜むよりて誠な靈驗あらば是鷲巢池の樹よ
住める鷲を祈ひ落ちよと白さしめ玉へば鷲落
ちて死よたり又祈ひ活きよと白さしめ玉ひ
るえ更よ活るへりぬ又甘白樽の前なる葉廣熊
白樽を祈ひ枯らし又祈ひ生る玉へりかく祈
ひの驗あるまゝに出雲に詣てしめ玉ひて大神
を拜まをへて還上りまは時出雲國造の祖岐比

佐都美肥河の中ふ黒檣橋を架し假宮を立て青
葉の山を河下よ作て大御饗を獻せんとする折
しも御子詔をくえ是の河下よ青葉の山おせる
ハ山と見へて山よあらは出雲の石堀の曾宮よ
坐は蘆原色許男大神を持齋く祝が大廷あ問
給ひしあば御供の玉等聞歡ひ見喜ひて御子を
檣御の長穗宮ふ坐せまつりて驛使をもて其由
を天皇よ奏しまつりき如此年久しく言語し玉
えざりし御子の大神を拜ましつるよりて
真事言玉ふ事やかりぬれば天皇甚く歡ひまし

て菟上王を出雲に遣して神宮を造らし免玉へ
 り此を以ても此大神の靈徳のほどを尊と恐と
 て厚く信頼し奉るへきことにかむ
 遠江國豊田郡平口村の丹藏出雲の大神の
 神助を蒙りて重病を治し長生を得し事
 遠江國豊田郡平口村といふ所小丹藏とて藥屋
 を家業とせむいと正直なる男ありけるが同郡
 石原村よ小栗廣伴直助といふ皇朝學よ志深き
 人ありけり丹藏常よ睦じく行通ひて或時丹藏
 問けらく我家ハ世々藥屋を家業よし侍るよ物

皆其始ハ神より起るを聞くもいまの藥屋の祖
 神を知らざるはいと淺まし事なり是ハ如何
 なる神よと教へたまはれんと云ひけきハ廣
 伴の答ふるやうハ醫藥乃祖神といふべきハ出
 雲國よまは杵築の大神なり抑此大神ハ國土を
 作り固め給ひて衣食住の三要を足らし玉ハ大
 き恩徳を蒙らしめ給ふが中よ病よかゝる苦
 まむ事をも救へむとて醫藥の道起し給ひ禽
 獸かどの災害を攘へむとしてハ禁厭の術を始
 め或ハ温泉の法かとも傳へ給ひその上幽冥

の主宰とかりて吾人の靈魂の上まで救ひ給へ
 る大恩のある大神なれば世人殊に尊信をべき
 えいふもさらなるがまゝして其許等の如きは其
 家業の祖神なれば朝夕其恩頼を蒙る事をか
 忘る給ひそと云ひなれば丹藏甚く喜び直に家
 よかへり神棚を祓ひ清め神酒御饌を供へて是
 まて薬屋と業とを一つに祖神とさへよ知ら
 ばて過ぬる事とをい猶往先我家業を榮えしめ
 給へと乞ひ祈けるとぞかくて夫より後八月毎
 よ御祭も怠らざりしを御恩を蒙るまともい

と深ありけむ三年をかりて經るまふ土藏二棟
 を立て五年の後よ益々富を得て家内何の足
 えぬ事もなくいと豊かき生計とかりなれは是
 ハ杵築の大神の御陰かりて朝夕の禮拜もど
 いよゝ懇切ふものせしを丹藏六十二歳のころ
 重き病よかりて家族はさらかり醫師も四五
 人ハ側を離るゝ事なく治療の術を尽せども水
 のみ心さゝか吞むまありて何の驗も無あり
 しよ或夜丹藏少しい寝ぶりしを眼を開き只今
 杵築の大神の御使我枕の上ふ來給ひて汝早く

我官よ参るべしと告げ給へり疾く我を連れ立
 て出雲よ越きてよと云ひをきば親族醫師を始
 側ふ寄集へる人々口を揃へて是ハ常ふ神次信
 ずる心の厚きよりかゝる夢をも見つるなるべ
 しとて肯ひらざりしは丹藏暫らくして又御使
 再び我枕上よ來りて丹藏早くまゐれ余汝を伴
 えむ疾々と手を取り給ふなりと云ひ多れば皆
 々心を苦しめ一夜一日も危く覺ゆるものを遠
 ふき旅路ハ思ひもそらば道中よて死もせんよ
 はらゐはせむと心惑ひて互ふ顔を見合せて

言葉を出すものもなれば丹藏重き枕を離れ
 て起き上りたとひ野山よ死ぬればとて大神の
 御心よを背られじゆゑてく連立べしと止る
 氣色も見えされば今ハ人々も詮方なく道中よ
 死すとも眼前の親の心よを背られどとて籠よ
 のせ悴を始め六七人伴ひて出立ぬ道すぢら
 ゐさまにして遠き出雲の國まで詣てむと思ひ
 煩ひおぢらも尾張國宮の驛まで行きけむ丹
 藏ハ聊心地よ一粥を食たしといふも皆喜びて
 やがて粥を勧めたるが久しくかゝる物の契難

かりしもほどく喰ひぬるより是がぶづき
 となりて大阪にてハ素麩を喰ひそれより追々
 處々ふて心よきさまに見えて食事も進み
 となり出雲國松江よりハ船のりて布崎の川
 岸に着け舟船をり上りて供人どもは丹藏をバ
 又籠よのせ茶店の前よ据おら辨當をつる
 むとて茶店よ入るるに病人自あら籠を出て同
 じく家よ入るるを見て是迄久しく歩むことは
 出来ざりしものを是ハいゝよと供人ハ驚き喜
 びたるがこれ則大神の恩頼を蒙りしよとる事

よて其時丹藏の物語も國を出しとて布崎に至
 るまでそこあちの眼よ見えざる状おれども
 御使の神の御姿を常よ顯きて導き給へりと語
 るるもぞさてハ疑ふ事なく大神の恩頼なり
 と恐む喜びあへりけるかくて丹藏の云ひを
 は追々心よくなりぬれハ今より杖よまがり歩
 行して詣てんと乞ふまに其云ふまかせて
 籠をバ茶屋よ預けおぬるに何の障もなく杵
 築よつき二夜三日ほど宿りて何くれと報賢を
 なし故郷よ歸りしが其飯路よハ杖も突る人

並み歩みけるハ大神の恩頼とハひひあぐらい
とも不思議なりたる事どもなりさて丹藏ハ
あゝるひこじき御靈驗を蒙れるよきて報賽
の爲として其後ハ年毎々遙々出雲に詣てくるが
其誠心を感じ玉ふ驗もちぞるく聊も病ること
なく七十有余まであらへしとかや此を見て
も神威乃嚴よして尊とむべきハ炳焉きものな
る扱や

狩野法橋永雲の出雲大社に詣て靈徳を蒙
りし事

狩野永雲ハ出雲の國守松平綱近の臣よて天質
鼻柱至て低し畫術よハ勝るもきども年老ぬる
よ從ひて眼鏡かけ難く畫らくふ甚勞して左手
に眼鏡を撃げつゝ有し汝時ハ延寶四年九月國
守よ從ひて大社に參詣せしふ平素信仰の志厚
けきども唯國守の壽命子孫の安康をのみ祈て
其身の爲よハ聊も願をいせざれとも人体の美
醜ハ鼻の高低ふ關すは鼻ハ形の本ともいふ
るきに永雲鼻の形薄く生きしハ人品の本意な
き事を思ひつゝ慈母の胎内よても神の加護あ

てある身と生ぬる坂今更ふ祈る夢き道か
 一と心ふ深く思ひ恐むぬ爰ふ社籠の折畏くも
 神夢あてて小蛇木葉を牙乃如く口ふ含み首を
 あげ尾を動ふる來て云えく大神汝が誠を感じ
 今我をして汝が鼻の隆準なるを願え、此葉を
 もて屢摩てよと教へさせ給へりといふまゝ夢
 さめけきは奇異の思ひをなして枕邊を見れば
 二枚の木葉ありいと不思議ふ思つゝ試ふ木
 葉をもて鼻を摩つゝ又思ふよかゝる奇異の事
 を廣く語らば世人妄誕とすべし輕々しく語る

べあらずと自ら戒めて有しに又夢よ告ありて
 汝或ハ信じ或も疑ある故も速に應し只専ら
 誠を尽して鼻を摩てよといひて覺たり神慮深
 く恵を垂せ給ふ事嬉ひ頻々他念なく木葉を
 もて摩しつゝ鼻梁いつとなく高く起り眼鏡も
 まさ自ら掛やすくなれる故猶謹みて人ふを語
 らざりき然るよ一日國守の前より出たるよ永雲
 ぐ鼻の高くおれるが如きといふと左右ふ間
 それを人々皆然りといふ是に於て始めて
 神夢を語り木葉を披露せよ其葉の形桃よ似

て桃よあらば永雲畫工なる故よ草木を普く知
るといへども何の葉たると或詳よせは國守始
人々其靈徳を感せらるるに永雲自らかの靈蛇
を摸し神夢の始終を儒士黒澤弘忠よ記さるめ
神賜の木葉とよに神殿よ納めらるるにても神
徳の微細或遺し給えざる或見るべし

石見國鹿足郡三伏村の農磯七が娘の縁談
のまとい出雲大社にて神計り給へる事
石見國鹿足郡三伏村の農磯七といふ者ある
年頃出雲の大社を信仰して毎年社参るなりけ

るが磯七よ寵愛の娘ありて程よき婿を取るか
むと思ひ居るよ其近き里よ身代も厚く殊よ
正直なる何某といふ者よ一人の悴あてて是又
世間の聞えも宜しき者よて此頃頻よ嫁を求む
る由の聞えけるより磯七何とわいて我娘を彼
よ娶せむと思へども婚姻の事ハ此方より言出
るべからずと種々思を廻らるる
其年聊の所用もあてて出雲國杵築よ來りしと
幸よ十月の大齋中のみとわかれはと誠心を
凝して宮籠しるよ其夜いたく深けて神前よ

何やら騒がしく物音の聞ゆるまゝ目と覺し何
 ふる聲ハ屢聞ゆきども姿ハ更不見え殊其
 聲尋常の人聲ともあらていと殊勝に聞えけ
 ば是ハ何事からむと心の内は恐みつゝ伺ひあ
 りしが數々の問答の中は石見の國三伏村の氏
 子磯七が娘ハ何がの妻は結縁定りぬといと
 あざやゝに聞えけきバ磯七不思議の思成し
 是吾が常々望む心の迷よりかゝる夢をバ見つ
 るからむと翌日杵築を立出て何心なく國は歸
 りし其年の霜月頃某の方より媒人來て其娘

を乞ける故に磯七をさてこそ先の月杵築にて
 聞たるハ夢からて此事を神の沙汰し玉ゑるも
 のなりなむと心の内は深く信じ年頃望める事
 かねバ速に承諾し其年の十二月に至りて婚姻
 も程よく調ひて夫婦の中睦じく翌年の二月は
 え妊身しけきバ磯七大ふ喜びて是までハ妻子
 小も告げざりけきども先年杵築にて聞たる夢
 の物語をバ婿小も云ひきあせ其年の三月の大
 祭に参詣して中官石田昌磨の宅に宿りて千度
 詣となり御神樂かども奏し其後益々大社を

信ずるまといと厚ありしとあや是をもて十月
月ハ諸國の神々の大社に参り集ひて其氏子の
事をも何くれと沙汰し玉へる由なる古傳の假
初からぬ事を思ひ悟るるし

出雲大社寄木御造營の事

出雲大社寄木御造營の事
朝臣光隆其由を奏聞して速に御造營あらむ事
を乞ふ此に於て朝議速に定り帥中納言家保を
して營造の事を司らしむ然るに帥中納言は神
託ありて大木數百本社邊に寄り集るべし其木

を以て梁棟柱桁等を用ゐ更に他の材木を採ら
せ造營の事を速にすべしと告げ玉へり時天

仁三年七月四日不思議あるな大木數百本稻

佐の浦に流き寄りぬれば其木を用ゐて自他の

勞を待ば棟梁柱桁の諸材木満足りて造營三年

の事畢りて永久三年十月二十六日遷宮の式も

調ひぬ是を後世寄木の御造營といふこの御造
營の事よつきていと尊き事のありけるハ因幡
の國一宮といふハ法美郡稻葉郷宮下村に鎮り
座と宇倍神社ある彼の出雲國稻佐の浦に大

木の寄り來れる頃宇倍社の近き海邊に長さ十
 五丈あり巨一丈五尺もやあらむ大木の自ら
 寄り來るハ其地の人民此の如き大木の寄り
 來ぬハ奇しき事トハ思ひあがら是を伐り取
 らむとして見れば大蛇の太木を纏ひ居ける
 故ハ皆々恐れ退きぬる彼の伐むとせし者病
 苦ハ腦まさる事切ぬりけむ種々祈りたる
 神託ありて告げ玉えく出雲大社造營の度毎
 諸國神等其事を司る事にて此度の造營を我
 行事にあたるを以て御材木ハ採り奉りぬ然

るハ件の木一本ハ余ク得分り急ぎ此木を以
 て我が社を造立せしと告げ玉へる故ハ人々
 驚き恐れてやがて宇倍社の造營調ひしと
 や此を見て出雲の大社ハ鎮座大神ハ幽冥
 の主宰にして諸神の仕へ玉ふを知るべし其故
 ハ宇倍社ハ鎮座す大神ハ武内宿禰命とて古
 代朝廷仕へらまし忠臣かりしガ幽冥入り
 ましてハ大神ハ從ひ玉ひまら出雲大社造營の
 度ごとと諸國の神々行事とあると宣へるを
 てハ心も明らかきものなりかの寄木の御造營

の事ハ康治二年三月十九日左辨官より大社の
 神官より下されし宣旨より記されて其宣旨ハ今
 も千家大教正の家寶として持ち傳らるたり
 出雲國杵築の青木某の船神助を蒙りて難
 風ふも恙なく飯帆せし事
 年毎の十月ハ古より諸國の神々出雲大社に集
 ひ玉へる事ハ世の人の普く知る事なるが夫
 つけて神等乃出雲に参詣て給へる不思議の事
 ありけり其ハ寛文中の事なりし能登國福
 良の湊に集へる船船百四五十艘もありて其内

よ杵築の船もありて頃しも十月上旬のことか
 れバ寒風凜烈白浪天に漲り出帆ハいつと期を
 べしとも更に見えさりけきを廻船の人々寄集
 りて福良明神に神樂を奏し速に船出すべきよ
 し茲祈りたるに神託ありて告げ玉えく當冬出
 帆ハ恐らくハ災あらむ來春をまちて心よく纜
 をとくべし然きども出雲大社の船ハ來る六日
 よ出船せむ相乘して守護すべしとありけきバ
 出雲國杵築廻青木某の船ハ甚く喜びて漕出
 せむ出雲の船のみ安く渡海すべきやうかと

て皆々船を出せし風波いと甚しく一里を
かり漕出し元の湊に吹き戻されぬるに夢あや
しけむかゝる中にも大社の船のこゝ大風波の
中も滞る事なく十月十一日つゝかゝく出雲國
宇籠湊に着船しけるに忽ち舳艫沈むと見えし
が更なる災かゝりけり是を福良明神の相乗して
助くべしと告げ玉ふ所よて此月ハ所謂十月を
れぞ此神も杵築の大社に集ひ玉へる事と志ら
まていと不思議なる事どもなき

出雲國杵築の町人平左衛門不敬の所業あ

りて隠岐の國焼火神社の御咎を蒙りし事
正徳年中出雲杵築の町人鍋屋與七郎の弟平
左衛門と云ふ者あり或時隠岐國の沖を廻船し
たる折しも俄に大風吹起り白浪巴の如く渦き
出て其船既に覆るべく見えけむ平左衛門を
始船子ども心を合せて今ハ神明を祈るより外
とと誓を切り拂ひ隠岐國焼火神社に祈りて靈
驗あらば速に参詣して御禮代をも捧げむと云
ひて一心に祈りたる間に風波やゝ穏になりて
終に恙なく隠岐國に着船しけるによりて彼の

燒火神社に詣てたきども平左衛門はかく神異
を蒙りて急難を免がれし事も深く思えは一
の禮物を奉らざるのみならず其上不敬の事の
多かりきとやあらくて程なく杵築の飯帆せ
しよ彼の平左衛門休相常ならは兄與七郎を招
き云ふやうに去ぬる日難風は逢ひ既は危うり
しを以て吾は祈る故力をそへて着船せしめし
よ一物の禮代を備へざるのこならは散錢ハ一
度棒びるあら再び己の手を取返し神を慢る不
敬の輩免し難しと云へども大社の産子なれば

心の儘ふも計ひあふし故に跡を追來せりとあ
りけきハ與七郎大に驚き改めて御禮参をも致
させ神慮をも慰め奉るべし平左衛門が不敬不
禮ハ只管よ免し給えれと様々な侘々れハ御心
もやゝ和ぎ玉ひぬる体よ見えて與七郎は向ひ
汝ハ今日吊の場に出て身体不淨なれば我は委
と見せ難し山崎屋某も今宵見せ置くべし故に
彼より委しく承ハせと有りける故に早朝山崎
屋は行ける某ハ上下を着し潮を以て家の内
を清めぬる折なるよよりいふよと問ふ某の

云ひけるやうハ前夜深更及ひ夢中目ざま
しき大蛇角をふり立て座中出ぬるを以て其
恐ろしき云えむるなし故まかくの通り家の
内を清むるなりときて益々恐れて吾家も飯
を平左衛門申せやうハ今日本國も飯るべ
れハ早く船の用意を爲せべしと告げば長
りぬとて直よ船装をかせ又云えく我汝の信
心を好む實ハ風波に乗て飯を船を出せ及
えびとて座中を二三遍立めぐると見えて神ハ
去り玉へりかくて皆々恐を慎み直よ舟装して

隠岐より渡り禮幣をも奉りて其御心を慰め奉り
しとかや此を以ても人ハ必心直く行正しく
て不敬の所業あるまじきハ云ふも更なるが大
社の産子なれば心の儘なりかゝしと告げ玉
へるを以ても大社の大神の殊も尊くいまは事
思ひえらまはしていと尊とからばや

備中國川上郡寶納村の者大社の社人の金
を盗みて祟を受けし事

頃ハ正徳四年の秋出雲大社の社人長谷川某備
中國川上郡寶納村と云へる所を通ける其村

人よ乞て荷物を送らせたり然るも次の村ハ山路よて路も隔りけむ彼の人夫忽ち悪心を生じ人の見ざるを幸よ竊よ荷物を開き銀二丁を掠め取りて跡ハ本のまへに結びおけるを以て更よ知るべきやうもなれバ聊咎むる者もなく打過きぬかくてその翌月よ至り彼の荷物を運びし人夫忽ち熱病を發し体相も常から正心なき狀よて數日經たりしや或日我ハ産土神あり汝去る月長谷川某の荷物を開き丁銀を掠めしよりかゝる災よ逢ぬれば早く其銀を返し

佐をなまべし然らざれば命もいよく覺束おしと云ひたる故よ家内を始村中の者ども大に驚き恐を直よ彼の丁銀よ禮物をも添へて長谷川氏よ依て只管佐しけむ幾程もなくして本復しけるとかや世よえ人目を掠めて他の物を竊よ取りて更よ知る者おしと思ひ居る人々もあるべけむとも神ハ幽冥より照覽し玉ふ事なきを此等の事をきへても必邪なる行ハあるまじきものなるをや

備前國磐梨郡石村の里人出雲大社の神人

備前國ハ名ヲおふ法花宗の多き地方にて神社
 の神札なや受る者も少く神の尊き事を知れる
 者もいとく稀なりける頃ハ享保十一年の
 秋出雲大社の中官西村勘太夫備前國磐梨郡石
 村を通りける時日も既暮及べるを以て人
 家立より宿を乞けども社人とさして皆つ
 きなく云ひてさら肯え故る爲方なく名主
 高原某の許に至り此由を物語りて日も既
 暮雨さへ降て土地の便もあらばいと惱ぬき

バ宿を貸し玉へとして只管乞し名主も心な
 き者もや有けむ又つきなく云ひ放ちられ西
 村ハいゝむともする事かなを心の内深く
 怒て我國ハ神國よして何れの里に神恩を蒙ら
 ざる所あらむことと年毎の十月ハ諸國の神
 等も悉く我出雲大社に集ひ玉ひぬれば此里の
 氏神としていゝて洩玉ふべき然るも杵築の産
 子たる吾をして一夜の宿をもあさしめざる時
 ハ此里の氏神杵築に行き玉ふも彼地にて宿り
 玉ふ所ハいゝとあらむと云ひ誓まつ立出け

るその年十一月石村の人家擧りて痢病流行し死する者多かりけし人皆恐を慄きける其村の或る八九歳なりける女子俄に体相常ならびて氏神の詫宣あり皆々参るべしとて村中の者を集めて去る十月出雲國大社に諸神と共に會せし我の假宿るべき方もなく物憂き日をば送りぬ其故いふとなれば過しころ大社の社人此所を通り日は行暮きて屢宿を乞ひし何れも心強くもして更宿を借さざり故かり此度かく惡病の流行するも

是より起きりと詞を勵まし眼を怒らして語りけしバ寄集へる人々ハあるねて覺ある事なれば種々ふ佗言しける故に神慮や、穩となり玉るさまよてさほど過を悔いなば免し遺さむこの後神社の事を疎略する事なく慎しめて怠るべらばとありて神ハ去り玉ひきかくて程なく痢病も治りけしバ村中の人ハ或ハ恐を或ハ喜ひかゝる靈驗ある上ハ更な疑なし早く大社の社人を頼みて信仰すべしとあるも過し秋西村の來らきしよりかゝる愁な逢ぬればこ

をを除きて多久某を頼まむと村中連印の願書
をさし出し多久某よりて大社を信仰せしと
ぞいと不思議なりける事どもなり

出雲國飯石郡富原村朝山某の妻冥助を得

て命を助かりし事

出雲國飯石郡富原村朝山某と云ふ者あり其
妻重病を得て種々醫術を盡せども更其驗な
く親族なども寄集ひて愁ひ煩らふ折しも出雲
大社の上官中某より用ありて人を遣えしよ
病氣の由を其人歸りて中氏に申せば兼て知己

の者なまば大社の大前よ於て病氣平愈の祈禱
をなし其供物をも送しに大社より富原までハ
十余里を隔ぬまば翌日よぞ達しける然るまか
の病婦其前日七ツ過頃俄に正氣を失ひ暫くあ
りて夢の覺めし体にて只今大社に参りつると
覺えて上官中氏烏帽子装束を着し幣をとり我
身を祓ひ清めて此度ハ遁まがさき重病なきと
も其方の夫篤實正直よして敬神の志厚きよよ
り救ひとらすべしと告げ玉へると云ふ夢見
りと云ひてそれよりさえやうなる体かりけ

バ人々怪し居るしる供物の送り届きしるを見
て祈禱満座の刻限と病婦の夢見一時と同時よ
して重き病も安らるよなりぬるハ専ら大社の
御冥助よよれりとして夫婦の信心も猶さら厚
るしとかや是ハ享保年中の事よて誠心の神明
を感格せしむる事けよあまかき事どもなり
土佐國長岡郡本山助藤村志和九郎左衛門
報賽の舟稻佐の浦よ流せよりし事
土佐國長岡郡本山助藤村志和九郎左衛門と
云ふ人あり年頃出雲大社を信仰して有りしゆ

其御靈徳を蒙りし事も人并からぬを其報賽
の験よ少き舟を作り初穂の錢をさへ入きて天
明元年十月十七日門前の谷川よ流せしが終
よ大海よ流せ出て出雲の國稻佐浦よ漂着しは
同三年四月廿七日かり此里の渡部新右衛門と
云ふ者此舟を拾ひ上げて見よハ徒事からばと彫
り入しよるを見よより是ハ徒事からばと直よ
千家俊秀國造よ出しけよ甚恐よて是ハ九郎
左衛門が報賽の赤心を受けさせ玉ふ御心さる
べしとてやめて其由を大社よ白して報賽の祭

とかし猶かく舟の寄着し事を告むとて神官の
矢田八種が土佐國へ行くと便にいひやられけむ
バ九郎左衛門甚く悦び其ハ我誠心の貫きぬる
よやといひて天よ呼もひ地よ躍りて涙を落し
て喜びしとぞ實よ誠の感應ハ恐きものなきバ
神を敬むむハ九郎左衛門の如く一筋よ乞祈
まつらバ此舟の山川の淵瀬よも沈まば大海の
沖よもえふまば大宮よ寄來し如く千万の願
言をも受け玉ひ諸ひ玉えずと云ふ事ハあらざ
るべきなり

備中國阿賀郡草間村の某氏神の祭を怠り
て重病を得し事

備中國阿賀郡草間村よ杉六郎右衛門と云ふあ
りて其手代の某ある者重病よて祈願醫術も其
まるしなく日よ増し月よ追ふまよく食事を
絶ち容貌衰へ心氣疲を既る一命も危く見ゆる
折しも出雲大社の社人長谷川某來らむと聞
きて急き招き請して祈禱をぞ願ひけるかくて
遠近の社司十余人を集めて千座の祓をかし行
事終る折しよかの病人神供を望み座を正して

之を受け常ハ粥をも厭ひ衰弱の病者あるが
黒米の神供を心よく戴くを見ていかなる事
やと或ハ喜び或ハ恐をけるとなむかくて彼の
病人いふやう此家の祖先ハ出雲國神門郡鹽冶
村より出し尼子行久と云へる武士なりけるが
當所より引移りて大國主大神を氏神として代々
崇敬して怠らざりし當代に至りて其祭を失
ふ故よまの祟を蒙り然るは今度をからま
長谷川某大社の大神を招きて祈をなまよ
て免すべしと云けむ皆々驚きていよく
詞

を尽して佞言しけるより此累月の重病も神供
をたづきとして日々食氣も進み程なく
平癒しけるとかやは寛保二年の秋の事あり
けり此を見ても人たる者ハ氏神を敬禮する事
怠るまじきものあらばや

備中國津高郡神瀬村黒瀬某の子三之丞出

雲大社に祈りて重病を治せし事

寛保年中備中國津高郡神瀬村に黒瀬某と云ふ
者ありて其子を三之丞と云ふ然るは此子幼年
より胎毒腫物たえは父母のうきひ大方あらば

東西より走りて祈禱をかし彼此より頼みて名醫の
手を尽せども其驗あらず於是術計つき途方よく
れて居りしが或時黒瀬某ふと思ひけるハ出
雲大社の大神ハ醫藥の本を始め玉へる大神を
まじりて此社に詣りて祈をかし猶もするしかくハ最早
思ひ残す事もあらずとて其子を籠よのせ遙々
杵築に詣りて彼の赤染衛門ダかえらんと祈る命
えをいあらせてさても別をん事ぞ悲しきとよめ
る如く子を思ふ親の心のよそめあらず只一念よ
祈しよ大神もあえをさとやおぼしけん二三日も

過るまに惱みつる所漸次痛去りて始ハ籠よ
助けらるるハ飯路ハ籠よも乗らば安々と歩
て歸りけしハ見る人皆大神の靈驗の病焉と感
ぜぬものえなかりとや

大和國葛下郡五位堂村の某出雲大社の御
玉串を祭りて火災を免し事

大和國葛下郡五位堂村の村長某ある者ハ兼て
敬神の志ふる殊に出雲の大社を信仰し大社
の社人藤間某より受けし御玉串は常々尊
祭りたりし頃ハ寛延元年夏の頃竈の前よ

一置たる柴薪は飛火して既ニ居宅も危かり
 に漸くよして其災を免むをぬ然るよいふ
 たりけん常ニ神棚ニ祭る所の大社の御玉串ゆ
 るなきよ落けをハ取上て見るよ不思議なる哉
 出雲大社御玉串の文字のみ鮮よ忘て其餘ハ
 色焼焦きてありけをバ見る人奇異の思ひを
 なし人の力以て火災を免がれし如く思ハ過
 みてさてハ此家みも焼くべありしハ大神の御
 助よよれる事なりけらしと彌益よ信心深く朝
 夕の神拜もまひくぬむごるかりしとろや

備中國淺口郡舟尾村農人出雲大社を信願

して稻虫の難を免きし事
 備中國淺口郡舟尾村ハ五千石よ余る大村あり
 しが寶曆九年の初秋非常の蝗よて山間僻地よ
 至るよて其蝗のあらざる所あり故ニ村中の者
 ども心を合せて通夜をぞして社人をして某氏社
 へ祈りしに或時氏神告げて宣えく今年ハ非常
 の災害よして吾ガ力よ及ハざる所あり早く出
 雲よ詣て祈りかえ其志しゆるべしとありけ
 せば村中のものども直よ申し合せて出雲よ詣

て其祈願をかせしに程なく蝗も退散して其災
を免がれしとかや是をり其村の者とも年々よ
怠る事なく大社々人長谷川某よりて千家國
造の御館を願ひて蝗退散の祈禱をかしつると
ありされば神代は鳥獸の災を攘えんとして禁
厭を始め玉へる古傳のおほるげならぬ事いと
あふとし

因幡國智頭郡星野村醫師某大社の神札の
靈驗よりて大蛇の難をのかせし事
因幡國智頭郡星野村醫師某ある者あり敬神

の志あまて醫術ハ普通ニ勝きてほるけき近
きあたりえいふまでもなく隣國なる美作伯耆
の兩國よりも治療を乞ふ者も尠らざりしが
一年夏の最中かりしが美作國真鍮村某の請よ
よりて彼國へ行くとて宅を立星野村より次
の村に越ゆる一の坂路をかゝりし頃頻に眠を
催しけきを幸大なる木蔭もありいと清らか
る石さへあき其上に打伏して暫時居眠り
が彼星野村の農人某用事ありて其所を通りか
りし此えいあるよる大木の一の枝より身

体の太さ一抱の余もあらんとおぼしき大蛇頭
 をさし下して石の上より臥する者を呑んとする
 勢の恐しき云ふありかけむば農人ハ肝を冷
 して物をもえ言えて蹲まり居るは彼石の上の
 人ハ更ま知らばと見えよ居眠れる状なる
 を聲を上げかを吾方よもや來らんうと唯恐れ
 慄き見居たる大蛇の口既ば彼人の身に至ら
 んと見れば不思議なる居眠れる人の脇差よ
 り稻妻の如き光物出て彼の居眠れる人の脇
 よりて大蛇ハ呑むと能をぞして頭を引取り又

呑んと見れば光物出て彼の大蛇も飛かゝる如
 此見るまど暫時よして終る呑むこと能えはし
 て去りぬかくて彼の農人ハ眠れる人を呼起し
 て見むば我里の醫師よて在りけむば打驚きて
 在りし状を物語るは彼の醫師ハ更ま知らずと
 答へて其危き所を免むしをよるこぶ中よもか
 く我脇差より光の飛出たるを扱ハ吾さしたる
 を奇代の名刀なるならむとて其後刀の目利を
 る者よ見たるよ誰人も名作ありと云ふもの更
 るなきゆゑよきてハ握の中ぞ故あらんと握糸

を解きて見せど更ニ變りし事もありしと握
 糸の下を卷たる紙を見せバ出雲大社の守札
 ぞありける是ニ於て醫師を始め見る人皆彼の
 光を發して大蛇を退けらしハ此御守の靈驗
 かりけらしとて彼醫師ハ更かり此由を傳へ聞
 く者益々大神の靈驗のいこじきを感じ其中
 も醫師ハ彼御守を神棚ニ祭りおきて日夜の拜
 禮怠らざりしとかや

備前國兒嶋郡下津井村の利兵衛出雲大社
 一詣て黄金の神像を授りし事

安永年中備前國兒嶋郡下津井村ニ菘の屋とい
 へる家ありて兄弟二人あり弟を利兵衛と云ひ
 しが兄ハ放蕩ニして家政治らす故ニ親族弟を
 以て家を續グせんとせし利兵衛思ひけるを
 たとへ放蕩かりとも兄たる者ガ家を續ぐハ理
 の當然なれを我かくして在らばこそかゝる事
 もあるなれ今より後え家を立出て諸國の神社
 参詣して吾一生を送らんと終る其家を出奔
 し諸國を巡りて出雲國杵築大社ニ参詣して大
 神の御神徳の高大なる事を何くも聞くもつ

けても此所よ足を止めて大神よ仕へまつらん
 と日々御社よ詣て掃めて社地の掃除をせしよ
 元より金の貯もなく又職業をかひふらざ
 れバ市中にて朝夕食を乞ふよ市中の者も其志
 を感じて争ひて食物を投くる故よ更よ飢渴よ
 至るよとハかうりよとや然るよ國元なる兄
 え放蕩願まして家をも亂し後よハ悪病よか
 りて空しくかりよけきバ只一人の母親頼むべ
 き方もなく日夜悲歎よ沈み利兵衛を尋ぬきど
 も數年間更よ行方の志きざきバ下津井村より

所々よ出る船人ども若利兵衛を見當かむ連
 歸りくよと頼置よ或年權兵衛と云ふ船
 人の北海よ行き歸る時出雲大社よ詣てしよ
 計だも利兵衛の掃除をしる見て驚き留主
 中家の衰微を始め兄の死たる事まで語りき
 かせて母の頼もあれバ早く家よ歸りて家名
 を継ぎたまへ幸ひ我も歸る事おれバ同船せん
 と云ひてよむるよ利兵衛ハ甚く愁歎してさ
 らば飯るべきかきども余ハ久しく此よ住まん
 と思ひしを俄よ歸る事を言ハ今五日の間御社

御社記
 二十九

の掃除をかして立さらんとて彼の權兵衛を
待せおぎ夫より晝夜御社地の掃除かどをかし
五日目の夜ハ拜殿の前ニ夜を明さんとて石階
の側ニ居眠りたるニ夜半過る頃夢よ一老人顯
せ給ひて其方えいと正直なるものなれば此を
授るよよりて終身齋き奉れとて一物を給へる
と思へば夢ハさめり此ハ不思議なる事なり
と思ひて其邊を見れば光りきらめく者あまは
手とりて見るよ黄金の神像なりけむ甚く
喜ひ拜謝して持ちへり夫より權兵衛と共に乘

船せよ乗合の者共彼利兵衛か何か一物を拜
えざるをあやしく思ひて頻よ之を見んと乞けれ
ども利兵衛さらよゆるさざりしに彼の響灘の
沖を通る頃人々寄集ひて是非彼物を見んとし
て争ひしよ誤つて彼像海中ニ落し入るぬ利兵
衛大よ力を落し此物を失ひてハ此世に居る心
もせねば海に投じて死んと云ふを乗合の人々
種々心をなだめて萩の屋に歸りしよ母の悦び
ハ一方からねど利兵衛ハ鬱々として樂まざり
しよ母ハ貧賤かまきども子の歸りし悦よ鯛を買

求めて料理して進めんとて腹を割られハ不思
 議にも一の神像あるを見て直に利兵衛申せ
 バ利兵衛其神像を洗ひ上げて見るは是ハいか
 異に響灘の沖よて取落せし神像かきバ甚く喜
 び是また家小歸りて母上よ逢ひぬるふも樂ま
 てありしハ此物を海よ落さゆゑあるを今か
 く我手よ還りぬるを我取落せし過を咎め給え
 ば再び杵築大神の授け玉へるかりとて喜悅を
 極めやうて其家の守護神と齋き祭りしよれ
 より月よ増し日に添へて家業繁昌して終よ下

津井村の菘の屋とて名高き豪富とかりしハ此
 より起まりとや是皆利兵衛ウ誠心のかき所
 かりと今よ至るまで人皆之を稱美せしハ安永
 四年の事かりしとか

但馬國朝來郡生野神谷佐兵衛の出雲大社
 但馬國朝來郡生野口銀谷よ泉屋と云ふ家の主
 神谷佐兵衛重昌ハ寛保亥子丑の頃不幸打續き
 て双親妻子八人まで失へり佐兵衛の愁歎ハ詞
 よ尽し難く死者の別を慕ふ涙よ沈みて今ハ此

世よ望まなく思放ちて出家して死者の跡を吊
 らはんとまて心を決めし親しき人々いさめ
 ていそく今其許の後妻を娶らば出家せらま
 よえ彌此家の血脉ハ断絶すべし早く心を取還
 して子孫の繁榮を願ふま祖先への孝行よて
 人の道といふものなれと堅く勧めぬるよ因り
 て佐兵衛も尤かりとて其後妻を娶りて思ふよ
 ハ五代以上の祖先神谷又右衛門ハ出雲大社の
 産子なれば此社よ祈らんよ一子誕生する事
 あらんと能くも心つきて他念なく思を凝らし

出雲よ請て上官別火某を頼みて厚く子孫繁榮
 の祈願をぞなしたるける然るよ妻ハ姪身と
 りぬまバ佐兵衛ハ神助ある事を嬉みて益々信
 心をなしつる間寛延三年丙寅の十月十七日
 の朝男子誕生しけまバ佐兵衛夫婦ハ云ふも更
 なり親しき人々も神徳の厚きまとを歡びて其
 子大像重孝と名づけつるが殊よその生れし
 日え出雲大社の祭日よて諸國の神々の集ひ給
 ひて氏子の事どもを事議りをへて其國々よ歸
 り玉へる日よしあまいと、佐兵衛等ハ不思

議の思をなして難有かりとやさて大像八
 歳よふれば報賽のよめ参詣せんと祈りし故よ
 寶曆三年三月佐兵衛ハ大像を伴ひて大社よ詣
 て何くれと開願の弊物を奉りて其事の由を板
 よ記して表題よ夫普天下卒土演誰不洩當御社
 憐哉爰神徳深妙記焉と書き奥よ種嗣て藤の實
 生のふとり哉といふ發句を添て社殿よ納めよ
 り此板ハ今も存せるを此ハ獨佐兵衛のミ然る
 よあらば至誠其道を尽して祈る時を其感應あ
 らばと云ふ事おき深く心よ留めて敬ひまつ

るべき事よなん

明治十四年十二月十三日出版御届
同十五年二月 刻成

定價二十五錢

編輯者 島根縣華族 故人 千 家 尊 澄

出雲國神門郡杵築東村八十三番地

校訂者 同縣平民 竹 崎 嘉 通

石見國邑智郡原村四十番地

出版人 同縣士族 千 家 武 主

出雲國神門郡杵築東村八十五番地

(御用書林 村上活版所印行)

